

外郎売り

第一節(約 446 字)

拙者親方と申すは、御立会の内に御存知の御方も御座りましようが、

御江戸を発って二十里上方、

相州小田原一色町を御過ぎなされて、青物町を上りへ御出でなさるれば、

欄干橋虎屋藤右衛門、只今は剃髪致して、圓齋と名乗りまする。

元朝より大晦日まで、御手に入れまする此の薬は、

昔、珍の国の唐人外郎という人、我が朝へ来たり。

帝へ参内の折からこの薬を深く込め置き、

用うる時は一粒ずつ冠の隙間より取り出だす。

依ってその名を帝より「透頂香」と賜わる。

即ち文字には「頂き・透く・香い」と書いて「透頂香」と申す。

只今は此の薬、殊の外、世上に広まり、方々に偽看板を出だし、

イヤ小田原の、灰俵の、さん俵の、炭俵のと色々に申せども、

平仮名を以って「ういろう」と記せしは親方圓齋ばかり。

もしや御立会の内に、熱海か塔ノ沢へ湯治に御出でなさるるか、

又は伊勢御参宮の折からは、必ず門違いなされまするな。

御上りなれば右の方、御下りなれば左側、

八方が八つ棟、面が三つ棟、玉堂造。

破風には菊に桐の臺の御紋を御赦免あって、系図正しき薬で御座る。

第二節(約 231 字)

イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、

御存知無い方には正真の胡椒の丸呑み、白河夜船、

さらば一粒食べ掛けて、その気味合いを御目に掛けましょう。

先ず此の薬を斯様に一粒舌の上に乗せまして、腹内へ納めますと、

イヤどうも言えぬわ、胃・心・肺・肝が健やかに成りて、

薫風喉より来たり、口中微涼を生ずるが如し。

魚・鳥・茸・麺類の食い合わせ、その他万病即効在る事神の如し。

さて、此の薬、

第一の奇妙には、舌の廻る事が錢ごまが裸足で逃げる。

ヒョッと舌が廻り出すと矢も盾も堪らぬじゃ。

第三節(約 386 字)

そりゃそりゃそらそりゃ、廻って来たわ、廻って来るわ。

アワヤ喉、サタラナ舌にカ牙サ歯音、ハマの二つは唇の軽重。

開合爽やかに、アカサタナハマヤラワ、オコソトノホモヨロヲ。

一つへぎへぎに、へぎ干し・はじかみ、盆豆・盆米・盆牛蒡、

摘蓼・摘豆・摘山椒、書写山の社僧正。

小米の生噛み、小米の生噛み、こん粉米のこ生噛み。

縹子・緋縹子、縹子・縹珍。

親も嘉兵衛、子も嘉兵衛、親嘉兵衛・子嘉兵衛、子嘉兵衛・親嘉兵衛。

古栗の木の古切口。雨合羽か番合羽か。

貴様の脚絆も皮脚絆、我等が脚絆も皮脚絆。

尻革袴のしつ綻びを、三針針長にちよと縫うて、縫うてちよとぶん出せ。

河原撫子・野石竹、野良如来、野良如来、三野良如来に六野良如来。

一寸先の御小仏に御蹴躑きやるな、細溝にどじよによろり。

京の生鱈、奈良生真名鯉、ちよと四五貫目。

御茶立ちよ、茶立ちよ、ちよと立ちよ、茶立ちよ。

青竹茶筥で御茶ちよと立ちよ。

第四節(約 328 字)

来るわ来るわ何が来る、高野の山の御柿小僧、

狸百匹、箸百膳、天目百杯、棒八百本。

武具、馬具、武具馬具、三武具馬具、合わせて武具馬具、六武具馬具。

菊、栗、菊栗、三菊栗、合わせて菊栗、六菊栗。

麦、塵、麦塵、三麦塵、合わせて麦塵、六麦塵。

あの長押の長薙刀は誰が長薙刀ぞ。

向こうの胡麻殻は荏の胡麻殻か真胡麻殻か、あれこそ本の真胡麻殻。

がらびいがらびい風車。

起きゃがれ小法師、起きゃがれ小法師、昨夜も溢してまた溢した。

たあぷぽぽ、たあぷぽぽ、ちりからちりから、つつたっぽ、たっぽたっぽ一丁蛸。

落ちたら煮て食お、煮ても焼いても食われぬ物は、

五徳・鉄灸、金熊童子に、石熊・石持・虎熊・虎鱧。

中にも東寺の羅生門には、茨木童子が腕栗五合搦んでおむしゃる。

彼の頼光の膝元去らず。

第五節(約 358 字)

鮎・金柑・椎茸、定めて後段な、蕎麦切り・素麺、饅頭か愚鈍な小新発知。

小棚の小下の小桶に小味噌が小有るぞ、小杓子小持って小掬って小寄せ。

おっと合点だ、

心得田圃の川崎・神奈川・程ヶ谷・戸塚は走って行けば、灸を摺り剥く三里ばかりか、

藤沢・平塚・大磯がしや、小磯の宿を七つ起きして、

早天早々、相州小田原、透頂香。

隠れ御座らぬ貴賤群衆の、花の御江戸の花いろいろ。

アレあの花を見て、御心を御和らぎやと言う、産子・這子に至るまで、

此の外郎の御評判、御存知無いとは申されまいまいつぶり、

角出せ棒出せぼうぼう眉に、白杵搦鉢ばちばち桑原桑原桑原と、

羽目を外して今日御出での何茂様に、

上げねばならぬ、売らねばならぬと、息せい引っ張り、

東方世界の薬の元締め、薬師如来も照覧あれと、

ホホ敬って

外郎はいらっしゃりませぬか。